

5-3 教員及び職員の情報通信技術活用能力の研修

5-3-1 FDのための情報技術研究講習会

<事業計画>

私立大学教員の教育技術力の向上を支援するため、大学・短期大学を対象に「FDのための情報技術研究講習会」を学外FDとして実施する。事前・事後学修及び対面授業を支援するLMS(ラーニングマネジメントシステム)の活用法、教員と学生、学生同士の対話環境を支援するツールの活用法、モバイルによる動画教材の作成法、アクティブ・ラーニングの授業マネジメントの工夫、講義を活性化するICTの使用法などをアラカルト方式で参加者の希望に応じて実施するとともに、ICTを用いた授業体験、教育の情報化推進に伴う著作権の基礎知識に関する情報提供を参加者全員に実施する。

<事業の実施結果>

「FD情報技術講習会運営委員会」を継続設置し、「FDのための情報技術研究講習会」を実施した。以下に委員会及び研究講習会の活動を報告する。

FD情報技術講習会運営委員会

2019年(令和元年)10月24日、11月21日、令和2年2月6日に平均7名が出席して3回開催し、開催計画の策定、実施準備を行った。

(1) 開催要項の策定

どの分野でも必要となるICTの活用方法及び教育改善手法の習得を目的に、私立大学教員の教育技術力向上を支援する学外FDとして開催することにした。

プログラムは、「全体会」で分野横断型PBL授業の重要性、学修プラットフォームに期待される機能、著作権法改正・補償金制度について情報提供を行い、教員が希望するアラカルト方式による9つのワークショップに分かれて、Google Classroom、LMS、教材作成、授業マネジメント、ルーブリック、ポートフォリオなどの知識理解と活用技術の獲得を目指して、以下のように開催要項を策定した。

2019年度FDのための情報技術研究講習会開催要項

1. 開催日程：令和2年2月26日(水)～27日(木)
2. 会場：追手門学院大学 茨木総持寺キャンパス (大阪府茨木市)
3. 対象者：授業改善に情報通信技術の活用を希望される私立大学・短期大学教員
4. 講習会の概要

大学教育に、自ら学ぶ力、自ら考える力を育てるアクティブ・ラーニングが望まれて久しくなります。しかし、アクティブ・ラーニングに積極的に取り組む意識はあるものの、実際にどのように自分の授業の中で展開していくのか、その具体的な方法に戸惑う教員も少なくありません。

これまでのところ、半数程度の授業では、知識の定着を目指したアクティブ・ラーニングとなっていますが、今後は知識の活用による課題探求や問題解決を強化することが不可欠となっています。そのような時に、どのような点に注意して授業づくりを考えたら良いのでしょうか。先生方もお気づきかと思いますが、学生が自分の問題として授業に参加し、自ら問題の発見・解決を訓練できるような学びをつくる仕掛けが望まれるのではないのでしょうか。

本協会では、学生が興味・関心を持って学びに入れるよう、ネット上で分野を越えて他大学や社会の有識者などと対話の場を形成し、自分の考えを持って新たな課題に挑戦して発想や構想を提案できる仕組みの可能性について、実験授業を展開しているところです。

そこで、本研究講習会では、どの分野でも必要となるICT(情報通信技術)の活用方法および教育改善手法の習得を目的として、教員と学生・学生間の対話を支援するツール、教室内と教室外での学修を支援するツール、動画・音声教材の製作、PBL

に ICT を活用する方法などについて、認識を共有するための「全体会」と実際に体験するための「ワークショップ」を設定しました。

【全体会】

(1) 分野横断フォーラム型授業の取組み

① 法政策等フォーラム型授業

中村 壽宏 氏(神奈川大学法学部教授)

ここでは、2 大学 3 チームで SDGs の「食品ロス問題」をテーマに、ネット学修で各方面の有識者と意見交流・助言を受け、解決策を提案する授業の有効性を確認します。

② 多職種連携フォーラム型 PBL 授業

片岡 竜太 氏(昭和大学歯科医学教育推進室主任教授)

ここでは、健康長寿社会での 6 分野（医学、歯学、薬学、看護学、栄養学、社会福祉学）での職種の役割を検討するため、ネット上で自己学修を行い、その成果をプラットフォーム上で共有し、テレビ会議ソフトで異分野の考えを確認した上で、自己職種の役割を考えるネット学修の有効性を確認します。

(2) 学修プラットフォームに期待される機能の紹介

袴田 真穂 氏（日本マイクロソフト株式会社パブリックセクター事業本部）

ここでは、対面授業と同様にネット上で課題認識、問題の洗い出し、解決策の意見交換、有識者との意見交流、他チームによる解決策の評価、様々な学修支援システムとの連携など必要な機能の一元管理が行える環境整備の可能性について紹介します。

(3) ICT 活用と著作権・著作権法改正の意義と補償金制度

中村 壽宏 氏(神奈川大学法学部教授)

ここでは、第三者の著作物の権利を保護する著作権の対応と、著作権法改正の意義と補償金問題について認識の共有を図ります。

【ワークショップ】

ここでは、Google Forms、Google Classroom、LMS、ポートフォリオ、ルーブリック、教材作成、モバイル活用などについて、知識理解から情報技術の獲得を目指して、参加される先生それぞれの希望に応じたアラカルト方式で実施します。

(1) ワークショップ 1 「Google Forms で授業を始めてみる」

[コース内容]

従来の一斉授業から一歩抜け出して双方向性の授業を展開してみませんか。Forms は、多彩な質問形式のコンテンツを簡単に作成でき、学修者に回答を求めることができます。先生はパソコンで、学修者はスマホで双方向の授業が実現します。LMS による授業まではまだ敷居が高いと思っておられる方に最適です。

ここでは、Forms での様々な質問形式のコンテンツの作成方法を体験し、ご自分の授業での ICT 活用の可能性を検討していただきます。

(2) ワークショップ 2 「LMS を授業に生かす」

[コース内容]

LMS (Learning Management System) は、学修支援を行うための便利なツールです。事前に資料を配布する、知識の修得状況を把握するなど予習の段階から、授業内での資料の提供、質疑応答、問題演習、授業後のレポート提出、小テスト、演習など、学修の様々な状況でオンラインによる支援が可能です。

ここでは、Moodle と呼ばれる LMS を用いて、このワークショップ用に準備したサンプルに、PDF 資料、討論、アンケート、課題提出などの情報を追加しながら、予習、授業、復習での利用方法の習得を目指します。

(3) ワークショップ 3 「モバイルによる教材作成」

(iPhone/iPad を用いたビデオ作成と YouTube 配信)

[コース内容]

近年、反転授業の事前学修、演習問題の解説、実習等のやり方の説明など、講義ビデオが活用される場面が増えてきました。最近では、モバイル端末を活用して簡単に講義ビデオを作成し、配信することが可能です。

ここでは、「講義ビデオの基礎」や「授業での活用ポイント」について解説します。その後、iPhone または iPad を用いて講義ビデオを作成し、YouTube で配信するまでの実習を行います。

(4) ワークショップ 4 「Google Classroom で授業を始めてみる」

[コース内容]

授業では、学修者の反応を確かめながら進めたり、学修者同士の話し合いを重視したり、あらかじめ課題を出しておいて課外で学ばせたり、授業のまとめや定着を授業後に課外で行うなど様々な形態が考えられます。

ここでは、Classroom で実際にクラスを作り、授業を構成する課題や質問、資料の登録方法を体験し、ご自分の授業形態にそった活用方法を検討していただきます。

(5) ワークショップ 5 「授業に生かす ICT ツール入門」

[コース内容]

ICT は、学生の学びをサポートできる有力なツールの一つです。しかし、実際にはどのようなツールがあり、どんな場面で利用できるのかわからず、使うことに二の足を踏んでいる教員が多いようです。

ここでは、授業に役立つような様々な ICT について講義・実習を行います。講義では、目的別に Web で提供されている各種ツールについて解説します。実習では、様々なケーススタディを通して、Kahoot! などの投票ツールを用いた状況把握をはじめ、共有ホワイトボード・付箋ツール・マインドマップを用いた協働作業、スマホを用いたワイヤレスプレゼンテーション、オンライン会議システムを利用した遠隔授業などを体験します。

(6) ワークショップ 6 「ルーブリックの作成と ICT 活用」

[コース内容]

近年、ルーブリックが注目を集めています。

ここでは、最初に、ルーブリックとは何か、どのような場面で活用できるのかといったルーブリックの基礎、および ICT を活用したルーブリックについて解説します。その後、ルーブリックの作成方法について解説し、自分の授業の具体的な課題に対してルーブリックを作成する実習を行い、グループでレビューします。

また、Google Forms を活用した学生の自己評価のためのルーブリック作成、LMS(Moodle)を活用した課題評価のためのルーブリック作成の実習教材を用意しています。Forms を使うと学生の自己評価結果を自動的に集計し、可視化することができます。余力がある方は、これらに取組むことも可能です。

(7) ワークショップ 7 「アクティブ・ラーニングで授業を進める」

[コース内容]

アクティブ・ラーニングで ICT を活用している事例を示し、様々な手法から効果的な方法を確認していきます。先生方の授業で求める成果と ICT の活用方法をグループで議論し、授業に取り入れることができるように進めます。多くの事例を参考にしながら進めますが、学修者が効果的に「考える力」や「思考力」を促進することも含めます。

(8) ワークショップ 8 「Google Sites でポートフォリオを作ってみる」

[コース内容]

ティーチングポートフォリオ、ラーニングポートフォリオなどポートフォリオという言葉が教育の世界でも耳にするようになってきました。

ここでは、ポートフォリオに興味のある方、これからポートフォリオを使ってみてみたい方を対象に、ポートフォリオとは何か、どのような使い方がされているのかについて解説をした後、ウェブサイトを簡単に作成できる Google Sites を利用した、ポートフォリオの作成方法、利用方法を体験します。

(9) ワークショップ 9 「PC を用いた動画教材の作成」

[コース内容]

近年、反転授業の事前学修、演習問題の解説、実習等のやり方の説明など、講義ビデオが活用される場面が増えてきました。

ここでは、パワーポイントで作成した資料を動画として提供する方法、PC の画面を取り込んだ動画教材作成の方法について実習します。また、作成した動画教材を LMS や YouTube で利用する方法についても実習します。

(2) 実施結果

2020年(令和2年)2月26日から27日の2日間開催し、追手門学院大学を会場に、24大学から34名の参加があった。以下にアンケートを踏まえた結果を報告する。

① 「全体会」では、分野横断型 PBL 授業について法政策等フォーラム型授業と多職

種連携フォーラム型 PBL 授業の取組み、学修プラットフォームに期待される機能、著作権法に絡む問題や今後の法改正の情報提供を行った。

参加教員からは、「異なる専門領域で行われている教育の取組みを知ることができ興味深かった」、「SDGs やフィールドワークなど次年度の PBL 授業に取り入れてみたい」などの感想が寄せられた。

- ② ワークショップは、「Google Forms・Classroom の活用」に2コマ、「LMS の活用」に2コマ、「動画教材の作成」に2コマ、「アクティブ・ラーニングのマネジメント」に1コマ、「ループリックの作成」に1コマ、「ポートフォリオの作成」に1コマ「ICT ツール入門」に1コマを設定し、アラカルト方式で実施し、その達成度を以下に掲載する。

ワークショップ名	達成できた	見通しがたった	達成できなかった
① Google Forms・Classroom 2 コマ	4 割	6 割	
② LMS 1 コマ	6 割	4 割	
③ 動画教材 2 コマ	6 割	3 割	1 割(1 人)
④ AL マネジメント 1 コマ	2 割	3 割	5 割(3 人)
⑤ ループリック 1 コマ	7 割	3 割	
⑥ ポートフォリオ 1 コマ	6 割	3 割	1 割(1 人)
⑦ ICT ツール 1 コマ	7 割	3 割	

- ③ Google Forms・Classroom は、「実際に授業でも使ってみたい」、「ちょっとしたヒントを頂けた」、「人数の多い授業では授業の準備や運営が大変と思った」など、授業を双方向性のあるものに改善していこうとする積極的な意欲が感じられ、今後は模擬授業なども含めて工夫する必要がある。
- ④ LMS は、「一方的に伝える授業なので LMS を取り入れたいと思う」、「地域貢献プロジェクトにどのように使えば良いかヒントになった」「使用方法の理解が深まった」など、ロールプレイングの部分を追加して授業での活用を意識させる工夫も必要かと思う。
- ⑤ 動画教材は、「苦手意識がなくなり前向きにビデオ作成ができそう」、「操作方法を動画で理解させることを考えていたが出来そうな気がしてきた」、「iPad,PC 両方で動画の作成方法が分かったので今後練習したい」とする感想の他に、「全体的なことがよくわからなかった」との意見もあった。
- ⑥ AL マネジメントは、「時間的に全部できなかったのが残念だったが、他の先生と討論できて良かった」、「アクティブ・ラーニングを実施してこなかったが、学生に議論させてみようと思った」など熱心に討議が行われたが、討議で扱ったテーマが難しいこともあり、グループ討議に ICT を活用して意見を整理し、新たな知見を見出すなどアクティブ・ラーニングのマネジメントについて十分な議論まで到達できなかった感じがする。
- ⑦ ループリックは、「持参したループリックの見直しができた」、「授業にすぐ使える内容だった」、「体系的にループリックを学べた」などであった。
- ⑧ ポートフォリオは、「使い方次第で可能性が広がると思う」、「PBL 評価のひとつにポートフォリオ作成の目途が立った」、「専門ゼミなら活用できそうな印象を持った」など、今後は、参考例やサンプルデータ等を増やすなどの工夫が必要であると感じた。
- ⑨ ICT ツールは、「知らないツールを学習できた」、「自分でやってみたことで使うイメージができた」、「アプリを使った具体的な演習を試してみたかった」など、授業でツールを利用する方向性は理解されたと思う。今後は、希望の多いツールに絞ってワークショップを組み立てても良いと感じた。

5-3-2 大学職員情報化研究講習会

<事業計画>

私立大学職員の ICT 活用能力の開発・強化を支援するため、大学・短期大学を対象に「大学職員情報化研究講習会」を 7 月頃に基礎講習コース、12 月頃に ICT 活用コースを実施する。教育の質的転換を目指した企画・提案及び学修成果を可視化する ICT の活用、IR システムの整備と活用、全学的教学マネジメントの確立を強化する ICT の活用、業務改革を主体的にすすめるための ICT 活用について、知識・理解の獲得と実践的な考察力の促進を支援する。

<事業の実施結果>

「大学職員情報化研究講習会運営委員会」を継続設置し、「大学職員情報化研究講習会」を 7 月に基礎講習コース、12 月に ICT 活用コースを開催した。以下に委員会及び研究講習会の活動を報告する。

大学職員情報化研修講習会運営委員会

2019 年(令和元年)5 月 23 日、11 月 5 日に平均 13 名が出席し、2 回開催して開催要項の策定、実施準備、開催結果の振り返りを行った。

(1) 基礎講習コースの開催要項の策定

基礎講習コースは、大学の職員が ICT 活用の可能性や工夫について基礎的な理解を深め、大学の管理運営や教育活動の充実に向けて主体的に取り組む考察力の獲得を目指した。

プログラムは、基礎的に学習すべき情報を私情協 Web サイトのコンテンツと、昨年度実施した本講習会の成果を踏まえて事前学習してくることを前提に、基本的な知識・理解を共有する「全体会」と ICT を活用した望ましい改善策の構想を検討する「グループ討議」の 2 部構成とした。「全体会」では、「業務革新ツールとしての ICT 活用と課題」、「学修の質保証・成果の可視化に向けた取組み」、「ロボットの活用による生産性向上に向けた取組み」、「教育改善計画を促進する教学マネジメントの取組み」の情報提供を行い、グループで疑問点の確認や理解の促進を図り、ICT を活用した教育改革・業務改革へ主体的に取り組む姿勢の気づきの共有を目指すことにした。「グループ討議」では、職員各自がどのように教育改革や業務改革に関与すべきか、話し合いを通じて現状分析及び課題の洗い出しを行い、3 つのテーマ(「教育の質保証を目指した学修成果の可視化」、「全学的教学マネジメントの強化」、「業務改革」)から選択し、望ましい改善策について中間まとめを行い、発表・相互評価を通じて、大学として望まれる対応策の構想案とりまとめを目指して、以下のように開催要項を策定した。

2019 年度大学職員情報化研究講習会 基礎講習コース開催要項

1. 開催日程：令和元年 7 月 10 日(水)～12 日(金)
2. 会場：ダイワロイヤルホテル THE HAMANAKO (静岡県浜松市)
3. 対象者：私立大学・短期大学に所属する職員
4. 開催趣旨

本協会では私立大学における職員の職務能力の開発・強化を支援するため、教育の質的転換を目指した企画・提案及び学修成果を可視化する ICT の活用、IR システムの整備と活用、全学的教学マネジメントの確立を強化する ICT の活用、業務改革を主体的にすすめるための ICT 活用について、知識・理解の獲得と実践的な考察力の促進支援を目的として研究講習を実施しています。

本コースは、参加者が、ICT 活用の可能性や工夫について基礎的な理解を深め、

大学の管理運営や教育活動の充実に向けて主体的に取り組む考察力の獲得を目指します。

5. 本コースのねらい

開催趣旨に基づき、参加者が次のような成果を修得することを目指します。

- ① ICTの活用が大学の管理運営、教育活動の充実に果たしている役割を認識する。
- ② 問題発見・解決プロセスの体験を通じて、自己の業務の改善や職場における課題解決にICTの活用を考え、提案できるようにする。

6. プログラム概要

【事前研修】

大学を取り巻く環境、社会が大学に求めること、ICTを活用した学修環境など、研修参加にあたり把握しておいていただきたい基礎的な情報について、本協会のWebサイト上のコンテンツで事前に学習していただきます。

【本研修】

第1部では、全体会において価値創造に向けた職員の役割を認識した上で、人材育成に対する政府の取組み、①教育の質保証を目指した学修成果の可視化、②全学的教学マネジメントの強化、③業務改革など、それらを実現するための情報通信技術（ICT）活用の意義について情報を共有し、課題認識を深めます。

第2部では、グループ討議により本研修の課題として設定した①から③の3テーマについて、自らがどのように関与すべきか、ICTを道具として活用した望ましい改善案の提言作りを通じて、主体的な考察力、イノベーションに取り組む姿勢の獲得を目指します。

第1部 全体会

(1) イントロダクション 「価値創造に向けた職員の役割」

木村 増夫 氏（上智学院理事長補佐、運営委員会委員長）

職員として認識しておくべき社会の変化と大学教育の役割、大学改革に主体的に取り組む心構えについて理解の共有を図ります。

(2) 情報提供

① 「業務革新ツールとしてのICT活用と課題」

遠藤 桂一 氏（芝浦工業大学情報システム部長）

大学の業務改革、教育改革におけるICT活用の現状を紹介し、業務を効果的・発展的に進める上で必須のICTについて、理解の共有を図り、利用にあたっての考え方を整理します。

② 「学修の質保障・成果の可視化に向けた取組み」

中村 信次 氏（日本福祉大学学長補佐、AP事業推進委員長）

ディプロマポリシーに対する学修達成度の可視化や、毎年度の学修計画・目標の設定と振り返りを通じた学生自身による自律的な学修改善のプロセスなど、学修の質保障のためにデータを多面的に組み合わせて活用する仕組みについて確認します。

③ 「ロボットの活用による生産性向上に向けた取組み」

神馬 豊彦 氏（早稲田大学人事部業務構造改革担当副部長）

定型的な業務をICT技術の活用をして業務の効率化と生産性向上を実現することにより、これまで対応できていなかった意思決定支援など業務の高度化を促進する取組みについて確認します。

④ 「教育改善計画を促進する教学マネジメントの取組み」

田中 邦子 氏（武庫川女子大学教育開発支援室課長代理）

大学教育の改善・改革提案を教学支援システムの掲示板機能を通じて、全教職員を対象に「教育改善・改革プラン」の募集を行う教育改革に向けたプラットフォームの構築と活用の仕組みと効果について確認します。

(3) 全体討議

事前研修を含め、情報提供について理解度の確認を行った上で、ICTを道具として活用した教育改革及び業務改革に主体的に関与することの重要性について、グループ及び全員で共有します。

第2部：グループ討議

(1) 討議と成果のまとめ

職員各自が果たすべき役割やそれを実現するための手段として、ICTを活用する意義・重要性について理解します。

本研修の課題として設定した3つのテーマについて、理想的な教育環境や大学運営などを実現するための課題の洗い出しを行い、解決方策の考察プロセス

- の体験を通じて、職員に求められる能力開発の向上を目指します。
- (2) 発表・相互評価
グループ討議の成果を発表し、グループ間での相互評価・意見交換を行い、様々な課題や解決のあり方があることを体験します。

(2) 基礎講習コースの実施結果

28大学から77名の参加があった。以下に、実施結果の概要を報告する。

- ① 「全体会」での反応は、「事前学習では教学マネジメントのイメージがわからなかったが、取組みを聞いて納得できた」、「理想を描き、何を改善できるか考え、ICT導入で終わりではなく、大きな理想の姿に近づけことの大切さを実感した」、「問題を洗い出し、課題解決を考えていくことが業務効率につながると考えられた」などであった。
- ② 「グループ討議」での反応は、「現状の問題点にここまで集中して向き合うことがなかったので良い刺激になった」、「違う地域、違う大学、違う価値観、様々な考え方に触れることができた」、「まとめる難しさを感じたが、解決案を出すプロセスを体験できて自信につながった」、「大学に求められる三つのテーマから選ぶのは大変だったがやりがいがあった、情報提供があり活用方法が考察しやすかったと思う」、「業務に忙殺されがちだが、直接関係ないことや大学全体に関することを考え知識を収集する努力が必要だと感じた」などであった。なお、開催結果の詳細は、巻末の2019年度事業報告の附属明細書【2-10】を参照されたい。

(3) ICT活用コース開催要項の策定

プログラムは、「学修成果の可視化と業務改革」をテーマとして、6件の情報提供により改革行動の一貫として、全学的な教学マネジメントの確立と質保証の取組みとしての学修成果の可視化とIRの活用、業務の質的向上を目指す取組みについて理解の共有を目指して構成し、以下のように開催要項を策定した。

2019年度大学職員情報化研究講習会 ICT活用コース開催要項

1. 開催日程：令和元年12月16日（月）
2. 会場：同志社大学今出川キャンパス
3. 対象者：私立大学・短期大学に所属する職員及び教員
4. 開催趣旨：「学修成果の可視化と業務改革」
AIや全てのモノがインターネットでつながる Society5.0、第4次産業革命の変化が、産業や働き方、生活に至るまで見られるようになってきており、大学教育には自分の目標を自分で見出し、多分野の知識を組み合わせて問題解決に取り組む人材育成に向けた教育改革が社会から要請されています。
それには、イノベーションを支える能力を生涯に亘って身につけられるよう、大学教育の質向上に向けた取組みとして、教育の質保証に対する改革行動が喫緊の課題となっています。
そこで、本研究講習会では、改革行動の一貫として、全学的な教学マネジメントの確立と質保証の取組みとしての学修成果の可視化とIRの活用、業務の質的向上を目指す取組みについて理解の深化を図ります。
5. プログラム概要
 - (1) 全体会
 - ① 挨拶
横川 隆一 氏（同志社大学副学長）
木村 増夫 氏（上智学院理事長補佐、運営委員会委員長）
 - ② 教育の質の保証と情報公表 - 教学マネジメント確立に向けた指針の検討、全国的な学生調査による教育の可視化 -

奥井 雅博 氏（文部科学省高等教育局高等教育企画課課長補佐）

- ③ 学修成果可視化と IR への活用－取組みと課題－
藤木 清 氏（関西国際大学評価センター長、経営学部教授）
- ④ 学修成果の可視化を効果的に進めるための基礎知識
中村 浩二 氏（株式会社進研アド **Between** 編集課編集長）
- ⑤ ロボット（RPA）の活用による業務の質的向上に向けた取組み
神馬 豊彦 氏（早稲田大学人事部業務構造改革担当副部長）
- ⑥ ノンプログラミングでの学内申請システム化による業務効率化・紙廃止の取組み
岡 潤也 氏（立命館大学情報システム部業務改善企画課長）

（４）ICT 活用コースの実施結果

65 大学 2 賛助会員から 118 名の参加があった。改革行動の一貫として、全学的な教学マネジメントの確立と質保証の取組みとしての学修成果の可視化と IR の活用、業務の質的向上を目指す取組みについて、5 件の情報提供を通じて理解の共有を目指した。

参加者のアンケートからは、「具体的な事例をまじえて説明があったので、理解しやすかった」、「先駆的な内容でとても勉強になった」、「RPA を導入するメリットがよく理解できた」、「学内申請のペーパーレス化について導入検討している中で勉強になった」、「大変分かりやすく、本学でも取り入れたいと思った」などの感想が寄せられた。

以下に 5 件の情報提供の概要を報告する。

- ① 「教育の質の保証と情報公表 － 教学マネジメント確立に向けた指針の検討、全国的な学生調査による教育の可視化－」として、教学マネジメント指針の検討状況、スマホを用いた学部 3 年生を対象とした大学教育や学びの実態を把握する試行調査の実施とその扱いなどについて説明があった。
- ② 「学修成果可視化と IR への活用－取組みと課題」として、関西国際大学から、学修成果可視化のツールとして「KUIS 学修ベンチマーク」を用いて、学生にディプロマポリシーに掲げる態度・姿勢・能力、問題発見・解決力、コミュニケーションスキル、専門的知識・技能の活用力がどの程度成長したかを定期的に振り返る機会を設けている。また、学生支援の IR 活用として、過去のデータからシグナルを読み取り、早い対応や支援対策の検討が可能となっている紹介があった。
- ③ 「学修成果の可視化を効果的に進めるための基礎知識」として、株式会社進研アドから、大学を取材したエピソードを交える中で、学修成果の可視化のコツは全ては可視化できない前提に立ち、可視化(評価)を教育力向上手段として考えることで、評価のための評価になってはいけないなどの説明があった。
- ④ 「ロボット（RPA）の活用による業務の質的向上に向けた取組み」として、早稲田大学から、支払請求伝票の入出力処理や研究資金の経理処理の適正運用、効率化、集中化などを目指した定型業務の改善の一環として、RPA（Robotic Process Automation）を 2018 年度に全学的に導入したことで、約 4 万時間の創出効果があり、余った時間を教育研究及び学生支援等の向上に活用することで、人員の削減には繋がらない質的向上の紹介があった。
- ⑤ 「ノンプログラミングでの学内申請システム化による業務効率化・紙廃止の取組み」として、立命館大学から、学生や教員の申請書類転記や二重入力を行わない発生源入力の実現を目指し、プログラミング不要な WEB・クラウド型ワークフローシステムの構築を進め、稟議書 1 万件、申請書 2 万件のペーパーレス化の紹介があった。

なお、開催結果の詳細は、巻末の 2019 年度事業報告の附属明細書【2-10】を参照されたい。